

〈近代〉のもつユートピア的意義を重視し、評価し直す

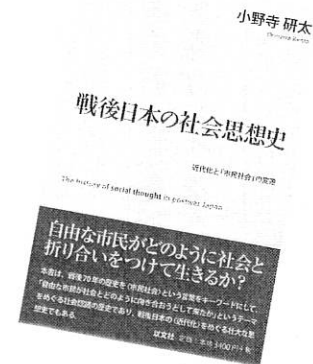
実践的な「思想」の構築へのスプリングボード作りを目指した書物

恒木健太郎

小野寺研太 著

▶ 戦後日本の社会思想史

近代化と「市民社会」の変遷
6・20刊 四六判352頁 本体3400円
以文社



本書の対象とした「市民社会」という言葉は、著者が「日本」の市民社会論→講座派に由来→前近代性批判→近代の「評価が甘い」というチャート式で半ば自虐的に説明しているほど簡単に処理される対象と化している。そうした傾向が明白になっていった2000年代に大学院に入ったとされる著者がこのテーマで二冊の本を物した勇氣に、同じく戦後日本の社会思想史研究の一端にかかわっている

と愛情が確保できるような、広範囲にわたる共同性の原理の探求を、「市民社会」言説の最大公約的な共通性として提示する本書は、「市民社会」のなかに込められた〈近代〉像のユートピア性に寄り添う姿勢を貫いている。大河内一男、高島善哉、内田義彦、松下圭一、平田清明、望月清司。彼らの描いた〈近代〉像

の作為性を「確信犯」として描き、その「虚像」が時代の要請でもあったことを著者は力説する。つまり、近代の実に相に迫った指摘をいくら行なっても、「市民社会」の言葉がもつ社会科学の諸分野を横断する社会認識の枠組みとしての「虚像」の思想的意義は変わらない、という主張が潜んでいるように思われる。

この感覚は、いわば実証主義への批判というべきだろうか。証主義の姿勢に潜む〈近代〉の区別を紹介する。いわく、前者は他者と生きる喜びを指し、後者は他者と衝突する不幸の最小化を目指す。そして、無数にある「関係のユートピア」同士が社会全域を覆った「関係のルール」にたがって互いを尊重しつつ共存する「メタ・ユートピア」が望ましいのだ、と見田（真木）は述べているという。この「メタ・ユートピア」に可能性を見出している点に、著者

人々のものとは異質であり、この系列に彼が並ぶのは評者からすると違和感がある。しかし、それが著者の意図なのであろう。著者は彼の「関係のユートピア」(交響するコミュニティ)と「関係のルール」(市民社会)という二つを著者は最後にあって主張してくる。市民社会の存在理由を引き受け「閉域」の設定を要し続けることを要求して閉じられる。今後は、その要求に自らに応えるような思想を紡ぐことを、著者は目指していくのだらう。その点で本書は、実証的な「思想史」としてよりむしろ実践的な「思想」の構築へのスプリングボード作りを目指した書物として読まれるべきであらう。

(専修大学経済学部講師)